



金沢医科大学(金沢大学医学部)校舎



金沢大学医学部附属病院



第四高等学校校旗 (校舎玄関)



第四高等学校講堂(至誠堂)と雨天体操場



第四高等学校校門前にて。柳川一成君(右)と著者(1947年ごろ)



皮膚科(川村太郎教授)外来患者臨床講義(Poliklinik)(1950年ごろ)



第四高等学校時代の著者(兼六園)



教室の窓から。右から戸谷真澄、柳川一成、船越宏洗、著者、黒梅恭芳、館野理雄(敬称略、1947年ごろ)

A)の脳研究所の元研究所長であったクレメンテ教授から手紙で、「貴方がUCLAのマザーン教授の研究室でハードな研究をしておられた当時を思い出します。何時かアメリカへ来られてUCLAを訪れ、私達と夕食を一緒にとられることを望んでいます。」と書いて来られた。懐旧の念を抱かされた。

この第二版が第一版と同じように、広く世間の人に読まれて、心の憩いを得られることを心から願うものである。

平成二十一年(二〇〇九)年卯月

山口 成良

「精神科医のエッセイ」の刊行に寄せて

金沢大学学長 中村 信一

金沢大学名誉教授山口成良先生は、この度瑞宝中綬章を受章されました。誠におめでとうございます。また、受章を記念して、本書「精神科医のエッセイ」を著されました。

昭和六十年頃のことですが白山登山の折、白山室堂から観光新道を通っての下山にご一緒させて頂いたことがあります。先生は赤い帽子を被り水筒を肩から斜めに掛け、日光キスゲが美しく咲き乱れる中を足取り軽く歩まれました。その様子が強く印象に残っています。先生は万年青年いや万年少年です。「精神科医のエッセイ」は、そのような先生の足跡の一断面を鮮やかに描いております。

第一章エッセイ集では、どの一編にも医師として、あるいは教育者としての思いがにじみ出



ニッコウキスゲ (著者撮影)

ています。先生のお人柄、純朴で真っ直ぐな精神科医の心が貫かれています。読む人に、心の憩いを感じさせます。第二章人物伝集には、先生が尊敬され、また先生の心に響いた五人の方々の記事が収められています。実に詳細かつ生き生きとした伝記であり、改めて先生の真面目で徹底する姿に接し、敬服いたしました。

先生は「金沢大学医学部百年史」では編集委員、「金沢大学医学部百年史以後30年の歩み」では編集委員長を務められ、これらの大部の史誌を編纂されました。金沢大学医学部は平成二十四（二〇一三）年に創立一五〇周年を迎えます。「金沢大学医学部150年史」編纂におきましても大いに力をお貸しいただけるものと期待しています。

平成六（一九九四）年、先生の金沢大学での停年退職にあたり、先生から「私の後は中村が引き受けるように」とのこと、十全同窓会会報編集委員長と白山診療部長を仰せ付けられました。この度先生の思いに幾許かでも御応えできればとの思いでこの拙文を書かせて頂いた次第です。

平成二十一年（二〇〇九）年一月

一 精神科医のエッセイ 目次

グラビア 生い立ちの写真集

緒言

山口 成良

第二版の刊行に寄せて

山口 成良

「二精神科医のエッセイ」の刊行に寄せて

中村 信一

第一章 エッセイ集

- 12 医学教育カリキュラム……………（日本医事新報第二五七二号、一九七三年）
- 14 指導教授制……………（日本医事新報第二六二四号、一九七四年）

- 16 母からのお願い……………（日本医事新報第三四五八号、一九九〇年）
- 18 マグーン教授のご逝去を悼む……………（日本医事新報第三五一〇号、一九九一年）
- 20 金沢大学医学部百三十年……………（日本医事新報第三五三三三号、一九九二年）
- 22 精神疾患と生体リズム……………（日本医事新報第三五六二号、一九九二年）
- 24 漫画療法……………（日本医事新報第三六一五号、一九九三年）
- 26 小学校のクラス会……………（日本医事新報第三六六七号、一九九四年）
- 28 被災者、退職者襲う喪失感……………（一九九五年三月十三日付北國新聞）
- 32 身障者の部屋に泊まる……………（日本医事新報第三七一九号、一九九五年）
- 34 「超」郵便物整理法……………（日本医事新報第三七七一号、一九九六年）
- 36 医学概論の講義……………（日本医事新報第三八二三号、一九九七年）
- 38 八甲田山雪中行軍で遭難死した永井源吾軍医
……………（日本医事新報第三八七五号、一九九八年）
- 42 中学生の学業時間と睡眠時間……………（日本医事新報第三九二八号、一九九九年）
- 44 八甲田山雪中行軍で遭難死した永井軍医追記
……………（日本医事新報第三九八〇号、二〇〇〇年）
- 48 雑誌の製本で貴重な資料が散逸する
……………（日本医事新報第四〇三二二号、二〇〇一年）
- 50 小泉総理、漆器がジャパンというのは知らなかった
……………（日本医事新報第四二九三三号、二〇〇六年）
- 52 マニュアル人間と自殺……………（日本医事新報第四三一五号、二〇〇七年）
- 54 秋元波留夫先生の一念……………（日本医事新報第四三四五号、二〇〇七年）
- 56 生きがいを考える……………（日本医事新報第四三九八号、二〇〇八年）
- 58 心の憩い……………（二〇〇九年二月二十四日付北國新聞夕刊「舞台」に加筆）

秋元波留夫先生の一念

金沢大学教授、東京大学教授、国立武蔵療養所所長、東京都立松沢病院院長などを歴任され、日本精神衛生学会会長をしておられた、わが国の神経精神医学界の大御所、秋元波留夫先生が、本年四月二十五日、満百一歳のご高齢でお亡くなりになった。

私は、昭和二十八年（一九五三年）四月、当時秋元先生が主宰しておられた金沢大学医学部神経精神医学教室に入局し、亡くなられる直前まで、先生の温かいご指導を受けた。入局時、われわれ新入局員に対して、先生は「私は君たちを指導するというような気持ちは全然持っていない。自分としては、君たちと兄弟のように相喜び、相苦しみながら精神医学の発展のために研鑽していきたい」と述べられた。

また、昭和三十四年（一九五九年）三月、東京大学教授と金沢大学教授の併任が解かれる時、「悠久な時の流れのうちでは私の金沢時代などはほんの一瞬にすぎぬ。時は流れ、人は変り、やがてはいかなる時代も過去の歴史の一節にくりいれられる時がくる。ただ、私は信ずるのだが、もし或る時代を作った者たちが利害や形式だけの関係でなく、心のふれ合いで結びついたのであれば、その時代は有形の業績をのこすだけに終ることなく無形の精神的遺産として伝統の形成に役だちうるであろう」と、金沢の教室を去るに臨んで記しておられる。

東京大学退職後の先生の執筆活動には目を見張るものがあり、著書、訳書には枚挙にいとまがないほどである。亡くなる五日前の四月二十日付けで、アントン・デルブリュックの『空想虚言者』を訳出、創造出版から発行された。ご高齢になられても、ものを書いたり講演しておられたのは、「ただ、精神病になられた人たちの役に立ちたいという一念。それだけなんです」と、取材の新聞記者に語っておられた。

秋元先生のこの崇高な精神を、日本医事新報の読者の方々に広く知ってもらいたいものである。

（日本医事新報第四三四五号、二〇〇七年）

心の憩い

毎日、精神科の外来を、色々の心の悩みをもった患者さんが、心の癒しと心の憩いを求めて受診されます。その中には幻聴や妄想など、実際にはありえない声や、非論理的な考えに悩んでおられる患者さんもいますが、日常茶飯事の嫁・姑の問題や、慣れない職場での適応障害や、漠然とした不安や、抑うつ気分を訴えてくるなど、その訴えは千差万別であります。具体的に不眠や、身体症状の改善を求めてくる場合もあれば、方々のお医者さんを尋ねて、検査の結果、どこも悪くないといわれたが、納得いかないと、不定愁訴をもって受診する患者さんもいます。時には、「死にたい」と涙ながらに、心の苦痛を訴えてくる場合もあります。

いずれにしても、精神科医には、患者さんの生い立ちから、現在にいたるまでの生活歴や病歴を詳しく聞き、必要な検査をして、正しい診断と、適切な治療をすることが求められています。それによって、患者さんに心の癒しと、心の憩いを与えるように努めます。患者さんに、「心の憩い」を抱いていただくためにも、診察する医師はタフでなければいけないと思います。アメリカの作家レイモンド・チャンドラーは、「タフでなければ、生きていけない。やさしくなければ、生きる資格がない。」と言っています。タフであるためには、ブレスロウの七つの健康習慣、①喫煙しない、②定期的運動をする、③中等度以下の飲酒をする、④七、八時間の睡眠をとる、⑤適切な体重維持、⑥朝食をとる、⑦間食をしない、をなるべく守るよう努めます。

アメリカのセシルの内科学教科書の冒頭に、「毎日、世界中に医療を必要とする患者さんは、私を一人の人間として診てくれる良い医師をどうして探したら良いか、私の話を聞き、理解してくれるために時間を割いてくれる良い医師をどうして探したら良いか、と求めています」と書いてあります。

これらの要望に少しでも答えたいと日々思っています。